生涯学習情報誌
- フォンズ -
Fons
回　覧
No. 98
2025年4月25日発行
常陸太田市フォンズ・ネットワーク事務局
常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061 茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL:0294(72)8888 / FAX:0294(72)8880
Webサイト:https://hitachiota-fons.jp/

写真:阿部 深雪

音の響きを支える〝影の立役者〟

常陸太田市民交流センター パルティホール　関谷 和行 さん

パルティホールは、市民の音楽家の声に後押しされて誕生したと聞いています。

その証といえるのが大ホールの生音の響きの良さです。マイクを通さない生演奏の素晴らしさを楽しめるように設計されていて、昨年も三味線の吉田兄弟、チェロの宮田大さんなど、世界の劇場を知る方々が響きの良さを称賛してくださいました。

それを支えているのが〝音響反射板(反響板)〟と呼ばれる、舞台を取り囲む壁のような設備です。舞台上での演奏音を反射して、客席に豊かな響きとして届ける影の立役者です。「え、見えてる？影じゃない？でも背景の壁としか思ってなかったでしょ？」

ただし、これを組み立てるには結構な手間がかかります。正面、側面、天井に分かれ、それぞれ何トンもの鉄骨がワイヤーで吊り下げられている仕組みで、上げ下ろし自体にも時間がかかり、さらにその動きで舞台幕を引っ掛けないように、何メートルもの幕を手作業で短くする作業も必要です。組み換えの前後には催事の用途に応じた照明機材の調整もあり、半日がかりになることも度々です。

だったらいつも反響板にしておけば？でもそれだと芝居もダンスもロックコンサートもできません。「パルティ」の意味をご存じですか。〝パル〟＝仲間が、〝シティ〟＝集うまち、自分の好きな音楽だけでなく、多様な人々がここに集ってほしい。そんな願いが、この超メンドクサイ反響板にも宿っているんです（笑）

それを伝える役目を日々組み立てながら感じさせてもらっているのかもしれませんね。

フォンズは、各戸配布ではなく、回覧板による閲覧のみとなります。お手元において読みたい場合は、生涯学習センター他市内施設にて配布しておりますので、ご利用ください。

特集

バックヤード

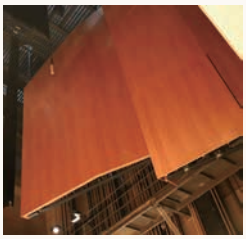
［取材］塩原 慶子、萩谷 浩司、阿部 深雪、武藤 卓

今回の特集は「バックヤード」。倉庫や作業場など人目にふれない裏方部分を意味する言葉です。華やかな舞台が滞りなく進むための努力、市民の皆さんの目には触れにくい場面を裏側からご紹介します。

パルティホールのステージは多くの方がご覧になったことがあると思います。しかしながら、その舞台の裏側まで足を運んだことのある方は少ないかもしれません。舞台袖やステージ天井には数多くの舞台を支える装置がありました。

吹奏楽やクラシックコンサートなどの舞台は、反響板という大きな板で囲われています。響きの美しさで知られているパルティホールの音を支える大きな装置は、いつもはステージ上の天井部分に格納されています。

正面と上側だけ組み立てられた反響版



格納中の側面反響板

側面の反響板が設置されるまで

※QRコードをスマートフォン等でスキャンするとタイムラプス動画を見ることができます。

数枚の大きな板がゆっくりと天井から吊り下げられ、組み合わせられてクラシックのステージは完成します。この反響板の裏側には、出演した演奏者の方たちがサインを残されており、特に上手下手の出入り口の付近には多くのサインを見つけることができます。

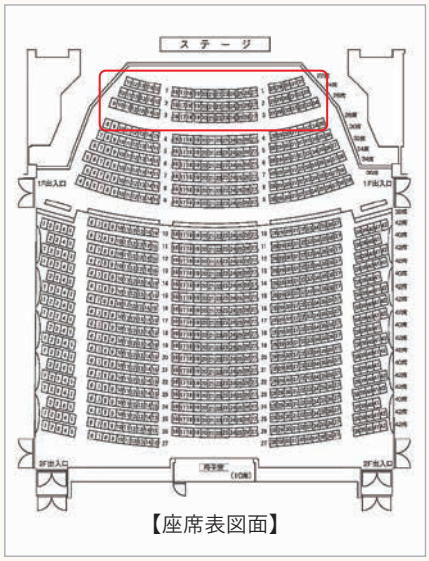
反響板裏に演奏者のサイン

ステージ天井には、反響板の他にも緞帳から始まり、スクリーンや各種の幕など数えきれないほどの舞台装置が格納されています。それらは舞台袖にロープでつなげられており、演出によってさまざまに組み合わされてステージに降ろされていくのです。

また、パルティホールの宝物の一つに、ドイツのベーゼンドルファー社製のピアノがあります。通常のピアノは八十八の鍵盤がありますが、このピアノは低音側に写真のような黒い鍵盤が拡張されており、全部で九十七鍵あります。このピアノは、パルティホールのピアノ開放事業において弾くこともできるそうです。

客席では、最前列から三列はオーケストラピットとして取り外しが可能となっています。オーケストラピットとは、オペラやバレエ等生演奏でステージを行う際、生のオーケストラが配置される部分を言います。実際にオーケストラが配置された時には、客席からステージが見えにくくなることの無いよう通常の客席より低めに作られています。

実際にオーケストラピットとして使用されたことはないそうですが、大きなテレビ番組の収録等で、機材を配置するために使われた例はあり、ステージ前の座席部分がいつもと違う様子をご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。

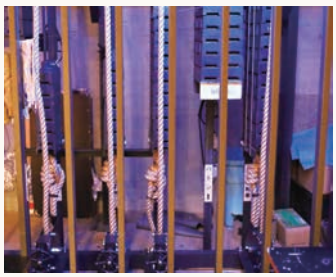


【座席表図面】

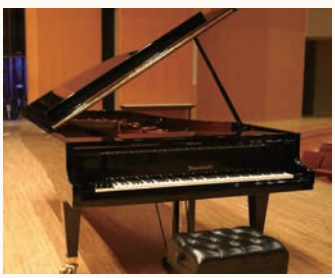
3列目まではステージと高さがそろうように作られており、オーケストラピットとして椅子を取り外すことができます

このほかにも、ステージ中央には奈落（舞台の床下を利用した空間）に通じるせり出し装置なども備えられています。

全ての装置は重量も大きさもあり、一つ間違えれば大きな事故に結びつき、舞台が台無しになってしまいます。慎重かつスムーズな運営は、熟練のスタッフに支えられているのです。



眼に入るロープの数だけ、天井につるされている舞台装置があります



左側に鍵盤が9つ多くあります

図書館

常陸太田市立図書館では、一人でも多くの市民の皆さんにご利用いただけるよう様々な工夫を積み重ねています。一冊の本が皆さんの手に届き、図書館に返却され、また貸出ができるようになるまでをご紹介します。

新刊図書は、納入先から図書館用の分類番号やバーコード、破損防止のためのカバーなどが張り付けられた状態で納品されます。この時、他の図書館では廃棄されてしまうことの多い本の帯も一緒に届けられます。帯はその場で写真のように様々な形に加工され、新刊と一緒にカラースキャンされます。スキャンした画像を左の写真のように「今週の新刊」として一目でわかるように掲示するためです。帯にはタイトルだけではわかりにくい本の魅力、内容、キャッチフレーズなどが端的にまとめられているため、それを有効利用しているそうです。このような掲示方法に変えてから、新刊の貸出率が大きくアップしたそうです。

スキャンしたのち、帯は本の表紙を邪魔しない位置に張り付けられます。このような形状を好まれない方もいらっしゃるそうですが、少しでも多く本の魅力を伝えたいという工夫のひとつです。また、タイムリーなテーマごとに所蔵書籍をまとめ、紹介するコーナーもいろいろと工夫されています。（写真右）

お子さん向けの書棚の近くでこんなかわいい棚を発見しました。（写真左上）これは「りんごの棚」といい、すべての子どもたちが利用しやすい形式の資料を集めた場所で、子どもたちが自分に適した資料に出会える手助けとなっています。実際に赤いリンゴの形を模した棚を作って提供しているのは常陸太田市立図書館だけの取り組みです。

さて、皆さんが読み終え返却された本はどのようにして棚に戻るのでしょうか。まずは、一冊一冊機器を使って消毒されます。点検の後、棚に戻されるのですが、長年利用されている間に破損した本も多くあります。そのような本はどうやって修理しているのでしょうか？

図書館を拠点に多くのボランティア団体が活動しています。その中の一つに、毎週図書館に集まり、本の補修を行っているグループがあります。県立図書館で本の修理の研修を受けてはいますが、補修に使う道具や材料は皆さんが試行錯誤しながら手づくりしたものも多いそうです。紙を張り付けるノリひとつとっても、市販品をそのまま使用できるわけでは無く、長年活動を続けてきた人から人へ工夫が引き継がれているのだそうです。

こうして、補修された本はまた元の本棚に戻され、図書館に来た皆さんに手に取ってもらえるのを静かに待ち続けています。

今週の新刊

本の表紙のスキャン

帯の加工作業

りんごの棚

図書専用の除菌機

タイムリーなテーマに沿った所蔵書籍の紹介コーナー

ボランティア団体による本の補修

酒造りの裏側

昨年十二月、国連教育科学文化機関（ユネスコ）で日本酒などの「伝統的酒造り」が無形文化遺産に登録されました。人生の様々な場面で使われることが多い日本酒ですが、どのように作られているかはご存じでしょうか？市内の酒蔵「岡部酒造」で酒造りの裏側を見せていただきました。

岡部酒造の壁に飾ってあった昔の酒造りの作業手順が描かれている図です。現在は使われていない道具も描かれています

まず、酒米を蒸気で蒸します。モクモクと蒸気が上がりお米の香りが漂ってきました。酒米は、日本酒の種類にもよりますが大吟醸などでは五割以上磨かれて使われています。昔は薪で何時間も火を焚いて蒸していたそうです。かまどの大きさから大変な作業だったことがうかがえます。今でもかまどの名残を見ることができます。

昔使われていたレンガ製のかまど

蒸し上がった酒米を手で均等に広げて冷まします。熱々の酒米を薄い手袋一枚つけただけの手で広げる様子は見ていても熱そう！酒米は一粒一粒が立っていて本当に美味しそうです。

適温になったら高温多湿の麹室へ。ここでの麹造りが酒造りの中でも味を左右する重要な工程です。四十度近くある部屋で種麹を均一に振り掛けながら酒米を混ぜ、混ぜ終わったらまとめて毛布に包んでおきます。この作業は二昼夜に渡って行われるため、職人さんは仮眠を取りながら行うそうです。

次に酒を絞ります。下の写真は機械に残った酒粕をはがしている作業。横に圧縮されて絞られるとは想像していませんでした。白い布についているのが酒粕で、ポロポロとはがれていく様子が面白かったです。

酒粕は袋詰めされて販売しています

瓶詰された日本酒はベルトコンベヤーで栓をされ、ラベルを張って完成。お酒の種類によって様々な瓶が使われています。以前は杜氏（酒造りの最高責任者）さんが冬場に泊まり込みで作業されていたそうですが、杜氏さんの高齢化などもあり現在は六代目の岡部彰博さんが蔵元杜氏として若い職人さん達と酒造りに励んでいます。常陸太田市の水やお米で作られたお酒はこれからも多くの人たちの生活に寄り添っていくことでしょう。

お祭りの朝

お祭りの花形といえばお神輿です。太田まつりでもお神輿が登場して威勢の良い掛け声が響くと会場の雰囲気が盛り上がります。

太田まつりでは夕暮れの時間とともにお神輿渡御がはじまるのが通例ですが、実は準備はずっと早い時間から行われているのです。祭りの花形・常陸太田みこし同好会「鶴龍會」の太田まつり当日の様子を取材しました。

多くの神輿渡御は、神社の祭礼として行われますが、太田まつりは「市民まつり」としての成り立ちから、神社等との結びつきはありません。「市民みこし」も、太田まつりを盛り上げるために市民に寄付を募って作られたものなのです。多くのお神輿は、お出ましになる以外の日、神社の敷地内の一角に納められています。では市民神輿はどこに納められているのでしょうか？

神輿殿は中城町のパルティホール裏側にあり、太田まつり当日、早朝より祭りの準備が始まります。準備が終わると、太田まつりが今年も開催できたことや、日頃の感謝を込めて市内を巡行し、市民神輿、万燈神輿を間近で見ていただきます。すでに三十度を超える暑さの中、飲み物などのご用意していただいている方も多く、担ぎ手の方々はホッと一息。市民の方への敬意や祈願の一本締めを行い、また次に向かっていきました。午前中は巡行を行い、午後からは神輿の渡御となります。

お祭りの花形としての神輿渡御が終わった後は、パルティホール裏にある神輿殿に戻り、来年も祭りが開催できることを願い神輿を納めます。その後、神輿渡御を無事に成し遂げた、へとへとの担ぎ手を直来（なおらい）でねぎらい、一日の終了となります。

神社の祭礼であっても、市民まつりであっても、本来は神様の乗り物である御神輿で、観衆を楽しませたり、お祭りを盛り上げ災いを転じたりするという願いは同じです。皆さんの目にふれない時も多くの鶴龍會会員が毎年市民神輿をお披露目できるようにと、日々大切に保管しています。

市民の方への敬意や祈願、そして日ごろの感謝を込めて市内を巡行

市制70周年・合併20周年を記念し、水戸市・那珂市の万燈神輿4基と鶴龍會を加えた5基で渡御・宮入となりました

常陸太田みこし同好会「鶴龍會」は、日本古来から伝わる伝統ある神輿文化を絶やさぬようにと、昭和五十九年に元市長・故渡邊龍一氏を発起人として生まれました。昭和六十三年に常陸太田に御神輿を！という市民の思いから作られたのが今の市民神輿です。これからも末永く太田まつりを華やかに盛り上げてくれることでしょう。

常陸太田みこし同好会「鶴龍會」市内を巡行した後、午後の神輿渡御の前に、皆さんで記念撮影

消防署のバックヤードを見学
――訓練と日常の裏側

消防署といえば、赤い消防車やサイレンの音を思い浮かべる人が多いと思います。私たちがイメージする消防署の裏側ではどんな準備や訓練が行われているのでしょうか？今回の取材では、「道の駅」の前の国道で交通事故が発生したことを想定した訓練を見学しました。

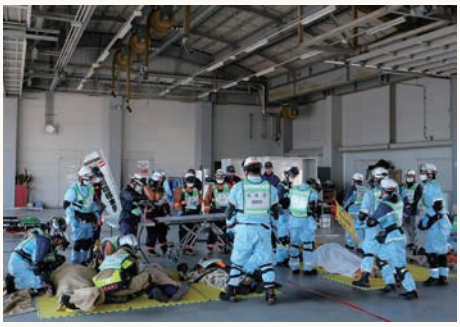
この訓練では、事故によって発生した多数の傷病者の車内からの救出作業とトリアージ（緊急度に応じた治療優先順位の決定）などが実施されました。実際の事故現場を想定し、各隊員がどのように動くべきかを一つ一つ確認しながら進行していきます。訓練後には、検証を行い、改善点や課題を共有します。

現場では、隊員たちが迅速にそれぞれの役割を確認し、担架や毛布なども使用して負傷者役の人々を救出していきます。無線でのやり取りが飛び交い、緊張感が漂っています。事故現場を想定した訓練は、日々の一つ一つの訓練を繋ぎ合わせて行う総合訓練です。現場指揮を執る本部が設置され情報を集約し、各担当者は役割を記載したゼッケンを着用して、実際の現場さながらに動きます。

消防署の仕事は多岐にわたります。国家資格として有名なのは救急救命士ですが、それ以外にも、クレーンや大型車両の運転、船の操縦、さらには潜水作業など、現場や地域に応じた幅広い技能が求められます。そのため、消防署の職員は日々訓練を重ね、自己研鑽を続けています。

署内を見学すると、綺麗に整った施設が目に入ります。全体の管理を行う事務室、体力錬成のためのトレーニングルーム、夜間の出動に備える仮眠室、そして職員の健康を支える食堂。ここでは職員自らが調理し、日々の食事を大切にしています。普段目にする消防車や救急車。その裏側には、いざというときに迅速に動けるよう、日々の努力が積み重ねられています。そして、それを支える建物の設計や動線の工夫もまた、緻密に考え抜かれたものなのです。

子供の頃に見学した覚えのある消防署も、その後ろ側がどうなっているかは大人になるとすっかりわからなくなっています。普段何気なく過ごす日常。その安全の裏には、私たちの知らないところで日々訓練を重ね、備える人たちがいます。いざという時、頼れる存在が近くにいてくれる――そんな心強さを改めて感じる取材でした。


訓練全体風景

傷病者の状態確認

傷病者のトリアージ訓練

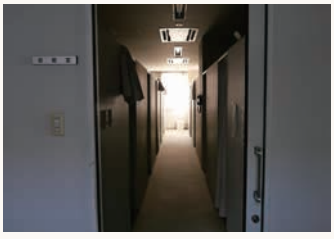
傷病者搬送

すぐに着用できる装備

待機中消防車庫

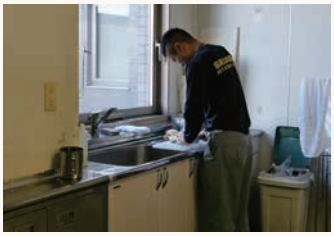
トレーニングルーム

整頓された消防車


仮眠室

日々、街の安全を守る

救急車


食堂・調理

100th

これまでフォンズの発行に際しお世話になってきた方々にお話をうかがってきましたが、今回はバックヤードの特集ということでフォンズの制作の裏側をご紹介します。創刊当初から編集チームに在籍し、長年デスクを務めた塩原慶子さんと、現在のデスクとして活躍する萩谷浩司さんの対談をお届けします。一〇〇号を前に、お二人にフォンズの軌跡を振り返っていただきました。

［取材］阿部 深雪、武藤 卓

塩原さん（左）と萩谷さん（右）

――フォンズの表紙は毎号とても印象的で、「この場所はどこだろう？」「こんな景色をいつ見られるのだろう？」とワクワクしたり、懐かしさを感じたりするものが多いですよね。お二人が印象に残っている表紙には、どんなものがありますか？

塩原――二十四号と八十八号の総合福祉会館の屋根が田んぼの水鏡に写り込んだ表紙がとても印象に残っています。私は日立市出身で、田んぼが広がる景色はとても新鮮で、田んぼの水がじわじわ広がっていく様子、すぐにいっぱいにならないということも、常陸太田に来て初めて知ったんです。初夏の田植えの時期にしか見ることのできない景色が本当に美しくて。それから、フォンズの取材を通して写真を撮る楽しさを覚え、カメラを始めたんですよ。そのおかげで新しい友人も増えました。

萩谷――私は二十号の、木崎二町の〝ヨマチ〟通りが表紙になった号が印象に残っています。今ではこの景色も見ることができなくなりましたが、市民が知る太田の町の美しさだけではなく、生活感も感じられて、この表紙で〝フォンズの視点〟を知りました。

――お話を聞いていると、フォンズの表紙には編集部や市民の視点が重なっているからこそ、印象的になるのだと感じます。フォンズならではの〝視点〟とは、どんなものでしょう？ また、編集の中で意識していたメディアとしてのあり方についてお聞かせください。

萩谷――フォンズを発行するにあたって、最初は市報との違いは何だろうかという戸惑いもありました。編集するにあたって、外から見た太田の姿や、市民の目線を大事にし、視点を変えることを意識していました。それから、『これから行ってみたい、やってみたい、体験したい』という、読者が次の一歩を踏み出したくなるような視点で情報を提供することも重要だと思っていました。それが、フォンズならではの視点だったんです。

塩原――市民が取材も撮影も編集も全て行っているという点を伝えるためにも、記事に名前を載せることを大切にしていました。また、読者からの感想をいただいたり、プレゼントを贈る企画があったり、双方向性を持つメディアになりたいと意識していました。

――いよいよ最終号を迎えるフォンズ。これまでを振り返って、どんな思いがありますか？ そして、これまでフォンズを手に取ってくださった読者の皆さんに伝えたいことはありますか？

塩原――とにかく楽しかったですね。フォンズの取材のためにあちこちへ出掛け、多くの方々と出会い、地域を知ることで、だんだんと常陸太田市民になっていったように思います。読者の皆さん、これまでフォンズをお楽しみいただけましたでしょうか？ 地域を知り、伝えて、よりよい故郷にするという、それぞれの生涯学習のきっかけになったのであれば、本当に嬉しいです。

萩谷――私も本当に楽しかったですね。デスクを任された当初は責任を感じて緊張もしていましたが、振り返るととても充実していました。信頼できる仲間に支えられて、楽しく仕事をしてきたと思います。取材を通してお届けしてきたことが、フォンズを読んでくださった皆さんの次のアクションに繋がっていたら、嬉しいです。

最後の編集会議後、集まったメンバー

生涯学習情報誌フォンズの通常版での発行は、今回が最後となります。長い間ありがとうございました。
99、100号は特別号として発行を予定しております（2026年2月生涯学習フェスティバルにて配布予定です）

お詫び

97 号の表紙の文章の中でふりがなに誤りがありました。ここに訂正し、お詫び申し上げます。
（誤）馬籠（まかご）→（正）馬籠（まごめ）

新太田点描 33

続、木村謙次

今年もまた例年通り元水府村の天下野町（江戸時代は天下野村）で凍蒟蒻づくりが行われた。これは天下野村の医師木村謙次が医業修得のため京都に遊学の折、たまたま京丹波地方で精進料理の具材料として盛んに生産されていた凍蒟蒻の製造方法を学び、気候風土がよく似た地元天下野村に伝授したという。

農政家、北方探検家として広く世間に知られている木村謙次の本業は医師である。宝暦二年（一七五二）天下野村に生まれた謙次は幼少から神童の誉たかく東金砂東清寺の真龍上人に就いて素読から四書五経等を学んでいる。

数え年十九歳になった謙次は地元天下野村での勉学では飽き足らず、師匠の一人で医師の谷田部東壑の紹介で、京都で名医との評判の高かった吉益東洞に弟子入りし約二年ほど医師修業に勤しんでいる。

その後、地元天下野村に帰った謙次は、安永四年（一七七五）十月、二十三才の時、更に医業知識を習得するため水戸藩の御用医師原南陽に入門している。入門帖の中から謙次の項を書き出してみよう。

「安永四年乙未十月入門　紹介者立原甚五郎
木村謙次
名謙字子虚久慈郡天下野人」

とある。ここで謙次の入門紹介者は立原甚五郎（翠軒）とあるが、この時謙次と翠軒との仲介者は謙次の師匠の真龍上人であったと思われる。

ところで南陽は藩医として藩主・藩士の脈をとる傍ら、広く庶民の診療にもあたっている。また南陽は水戸藩内外から数多の門人を受け入れ養成しているが入門帖には二百二十余人の名前の記載がある。ちなみに現在の常陸太田市域からの入門者は十数名を数えるが、またいずれかの機会に紹介したい。

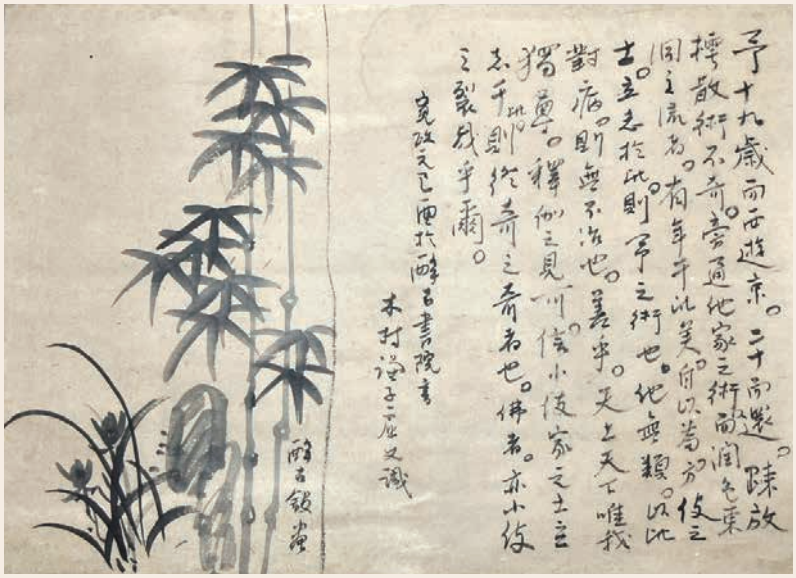
水戸で更なる医業習得に励んだ謙次は、地元天下野村に立ち戻り医業を専らにしていたが、日本近海での異国船の出没の噂を耳にするようになると次第に海外の、特に蝦夷地等北方領土に関心を持つようなった。

こうしたことから謙次は師翠軒の援助を受けての陸奥地方を旅行の折、仙台で寛政三奇人の一人林子平を訪問し国防を論じたりしている。

また後年には幕臣近藤重蔵の従者一行の中の一人として蝦夷地探検に加わり国後・択捉島に渡り得撫島との海峡を日本国とロシア国との国境とするに択捉島の東端に「大日本恵登呂府島」の標柱を建立している。

北方探検後の謙次は、地元天下野村に在っては天明の飢饉等によって荒廃した近在近郷の農村に目を向け、同郷太田町の高野昌碩等と共に農村政策に関心を持つようになり、農村の実情と再生復興を主眼とした『足民論』書き上げ水戸藩に提出している。他に天下野村をはじめ近隣村々の身近な出来事やエピソードを収集して『酔古館余話』などを書き残している。

左に掲げたのは木村謙次の自画自賛の『蘭竹図』である。これは近藤重蔵一行として国後・択捉島の探検に出立する時、遺書として書き残したものであったが、後になって師匠の立原翠軒宅に届けられたものだという。（小妻町　吉成英文）



（ひたちなか市　大山富彌氏 所蔵）